

本原稿は

[Nawata, K. & Yamaguchi, H. \(2013\). Intergroup retaliation and intra-group praise gain: the effect of expected cooperation from the in-group on intergroup vicarious retribution. *Asian Journal of Social Psychology*](http://online.library.wiley.com/doi/10.1111/ajsp.12032/abstract)

<http://online.library.wiley.com/doi/10.1111/ajsp.12032/abstract>

の日本語訳原稿（英語化前原稿）です。

もし引用されるときには、上記の英語論文を引用して下さい。

縄田健悟・山口裕幸（九州大学）

Nawata, Kengo & Yamaguchi, Hiroyuki

Faculty of human-environment studies, Kyushu University

[Title]

集団間報復と集団内賞賛獲得：内集団からの協力期待が集団間代理報復に及ぼす影響

Intergroup retaliation and intra-group praise gain: the effect of expected cooperation from the in-group on intergroup vicarious retribution

[Abstract]

集団間代理報復とは、外集団成員が内集団成員に攻撃したのちに、被害者集団の成員が加害者集団の成員に報復する現象である。本研究では、内集団からの協力が、賞賛獲得と拒否回避に基づく集団内評判を通じて、代理報復に及ぼす影響を検討した。本実験では、参加者は以前の対戦で外集団成員（勝者）が内集団成員（敗者）に罰金を与えたことを知らされた後に、参加者（勝者）が対戦相手に自由に罰金を与えられる場面による一対一対戦ゲームを実施した。予測通り、参加者は内集団から協力を期待されているときに、協力を期待されていないときよりも、大きな罰金を与えていた。さらに、参加者は罰金を与えることを集団内強力だと見なしていた。パス解析の結果から、賞賛獲得の媒介効果が見られた一方で、拒否回避の媒介効果は見られなかった。したがって、内集団からの協力を期待されると、仲間からの賞賛を獲得しようとして、より強い集団間代理報復がなされることが示された。本知見から集団間紛争は、協力期待と賞賛獲得という集団内評判の力学により激化することが示唆された。

[Keyword]

集団間代理報復, 集団間紛争/集団間葛藤, 集団間関係, 報復, 評判

集団間代理報復

集団間紛争では、他の集団の成員が自分の集団成員へと危害を加えたときに、それを知った被害者と同じ集団の成員が、加害者と同じ集団の別成員に対して報復を行うことがある。この現象は、集団間代理報復 (intergroup vicarious retribution) と呼ばれる (Lickel, Miller, Stenstrom, Denson, & Schmader, 2006)。具体的な場面としては、あるイスラエル人があるパレスチナ人に暴行を加えたときに、それを見た別のパレスチナ人が、また別のイスラエル人に暴行し返すといった場面が考えられる。集団間代理報復の重要

な特徴は、報復の加害者、被害者がともに、当初の危害行動の加害者でも被害者でもないという点である。すなわち、代理報復は非当事者間で生起する。代理報復は非当事者を巻き込むために、代理報復はさらなる代理報復を引き起こし、報復の連鎖となり紛争は激化する。

従来の研究では、社会的カテゴリー化 (Turner, Hogg, Oakes, Reicher, & Wetherell (1987) の観点から、内集団同一視と外集団実体性が、集団間代理報復の生起に重要な条件であることが指摘されてきた (Lickel et al., 2006; Stenstrom, Lickel, Denson, & Miller,

2008)。社会的カテゴリー化による内集団同一視と外集団実体性知覚は、代理報復が生起するための前提条件だといえる。しかし、代理報復の促進要因としては、社会的カテゴリー化以外にもさまざまな要因が考えられるが、これまで社会的カテゴリー化以外のメカニズムに関してはほとんど検討されていない。本研究では、集団間紛争における集団内評価力学の視点から代理報復にアプローチする。

集団内評判としての内集団からの協力期待の影響

本研究の目的は、代理報復における集団内評判の役割を示すことである。攻撃における観衆効果の研究は、攻撃は他者がどう考えているかによって、その強さが依存する行為であることを示してきた (Borden & Taylor, 1973; Froming, Walker, & Lopyan, 1982)。そのため、反社会的規範を持つ非行集団では、仲間集団での評判を高め、賞賛を獲得するために、反社会的な攻撃行動が促進される (Emler & Reicher, 1995)。つまり、攻撃性においては、仲間内での評判が重要な役割を示す。代理報復もまた集団における攻撃行動であり、所属集団内の他者からの評判の影響を受けるだろう。

本研究では、集団内評判力学の一つの側面として、内集団からの協力期待の影響に着目した。近年は、集団間紛争と集団内協力の密接な関連性が指摘されている (Choi & Bowles, 2007; Puurtinen & Mappes, 2008)。協力の研究によると、協力は自らの preference や価値観のみに基いて協力するわけではない。協力においても同様に、人は集団内の他者からの良い評判を求めて協力する (Van Vugt & Hardy, 2010)。集団内協力には評判的側面があるために、内集団からの協力期待という集団間紛争の攻撃行動と密接な関連があるといえるだろう。

代理報復と集団内協力との関係として、Nawata and Yamaguchi (2011a) は、代理報復は一種の集団内協力として認知される可能性を指摘してきた。代理報復は一種の集団内協力として認知されているため、代理報復は集団内評判力学の中で強まるだろう。我々は内集団での協力期待の効果を検討する。内集団成員が他のメンバーから協力を期待されたとき、彼らは良い評価を得るために、その期待に答えようとする。したがって、内集団成員から協力を期待されたときには、集団内協力としての代理報復によって内集団からよい評価を受けることを予期するため、より強い代理報復が行われると予測した。

さらに、本研究では、内集団他者からの協力期待の評価的影

響には、2つの異なる側面があると考えた。一つは、代理報復を行い、内集団からポジティブな評判を獲得しようとする積極的側面 (賞賛獲得) である。もう一つは、代理報復を行わないことによる、内集団からのネガティブな評判を回避しようとする消極的側面 (排斥回避) である。これは、ポジティブな報酬を獲得するという側面とネガティブな罰を避けようとする側面は異なることが指摘されているという近年の研究と同様のもの (c.f. BIS/BAS, Carver & White, 1994; promotion and prevention focus in self-regulation, Higgins, 1998)。Nawata and Yamaguchi (2011b) では、賞賛獲得が内集団観衆から見られることと代理報復の関係を媒介していたが、拒否回避の側面は測定されておらず、その影響は分からない。本研究では、これら2つの側面を弁別し、賞賛獲得と拒否回避が、どのように代理報復へ影響するのかを明らかにする。

以上より、本研究では、集団内評判力学の視点から、内集団の協力期待が、賞賛と排斥の評判過程を経て、代理報復を強めるという仮説を検証する。

仮説

仮説 1. 内集団からの協力期待は、代理報復を強める。

仮説 2. 代理報復は、集団内協力としてみなされる。

仮説 3. 内集団からの協力期待が代理報復を高める効果は、賞賛獲得と排斥回避から説明される。

方法

実験参加者

日本人大学生・大学院生 54 名 (男性 33 名, 女性 21 名; 平均年齢 19.71 歳, $SD = 1.29$) である。実験リクルートの際には、500 ~ 1000 円の実験報酬があることを示した。外集団の存在に疑いを抱いたと答えた 4 人を最終的な分析から取り除いた。

要因計画

内集団からの協力期待 (あり vs. なし) の 1 要因 2 水準参加者間計画で実施された。

手続き

本実験は、友人どうしの 3 人集団で実験を行った。そして、この 3 人集団を「赤チーム」と名づけた。別の部屋には 3 人からなる「青チーム」がおり、同時に実験を行っていることを告げた (実

際には青チームは存在しない)。最初に、青チームとは別に、集団形成のためのトランプを行ってもらった。

2つ目のゲームは、コンピュータ上で行う1対1の対戦型もぐら叩きゲームである。このゲームによって、代理報復を検討した。実験者は次のようなルール説明を行った。もぐら叩きゲームとは、画面上に出てくる30匹の「もぐら」をできるだけ早くクリックしてもらうゲームであり、その時間の早いほうが勝者である。罰金として、勝者は敗者の報酬を減らすことができた。その範囲は0-500円である。この罰金は勝者のものになるわけではない。もぐら叩きゲームでは、3人×2チームの計6人によって3対戦を順に行うと告げた。同チーム成員どうしの対戦もありうることが告げられた。

以上のルール説明の後に、参加者一人一人に仕切りのあるブースに入ってもらい、ゲームを始めた。そして、参加者はランダムに割り振られて、自身のID番号と対戦回戦と対戦相手を知らされた。実際には、参加者全員がID番号「赤チーム②」で、「第2回戦」の外集団成員「青チーム①」との対戦へと割り当てた。

対戦の前に、参加者は「私は、このゲームにおいても、同じチームのメンバーに対して、お互いに協力してほしいと思っている。」という質問に対して答えた。項目は「(1)協力してほしいとは思わない」～「(7)協力してほしいと強く思う」の7件法であった。この質問に対する内集団成員2人の回答を、後に参加者に提示することで、協力期待の操作を行う。また、これを自身の協力期待として分析した。

第1回戦、第2回戦としての4分の待ち時間の後、第2回戦で、勝った外集団成員(青チーム③)が負けた内集団成員(赤チーム①)の実験報酬500円から300円を減らしたという結果が参加者に示された。つまり、参加者は、内集団成員が外集団成員から被害を受けたことを知った。

次に、参加者に第3回戦を実施してもらい、全員が自分が勝ったことを知る。参加者はゲームの勝者として、対戦相手である外集団成員(青チーム□、第1回戦の対戦者とは別)に対して、罰金を与えることができる。この罰金の大きさを、代理報復の指標とした。

その際に、上で測定した協力期待に関する質問への他の内集団成員2人の回答を提示することで、実験条件を操作した。内集団からの協力期待あり条件では、内集団成員2人が7件法で「7点」および「6点」を答えているという情報を提示した。内集団からの協力期待なし条件では、内集団成員2人が7件法で「1点」お

よび「2点」を答えているという情報を提示した。なお、本実験では、内集団からの協力期待の効果を高めるために、自らの決定した罰金額は、内集団成員2名に伝わることを罰金決定の際に示した。

参加者にはそのままPC上で、事後質問項目への回答を行ってもらった。最後に、ディブリーフィングを行い、実験手続きに疑問を抱いた点はなかったか尋ね、実験を終えた。ここで実験手続きに疑問を抱いたと答えた者を分析からは除いた。実験参加者には全員1000円の謝金が支払われた。

事後質問項目

報復動機づけ「罰金を決める際に、第2回戦の敗者の仕返しをすることを重視した」の1項目を用いた。

賞賛獲得「罰金を与えることで、私は赤チームの他のメンバーから尊敬されるだろう」などの3項目 ($\alpha=.76$) を用いた。

拒否回避「罰金を与えないと、私は赤チームの他のメンバーから嫌われるだろう」などの3項目 ($\alpha=.70$) を用いた。

罰金=協力認知「私が罰金を与えることは、チームメンバーどうしの助け合いの一つだと思う」の1項目を用いた。

内集団同一視「私は赤チームに愛着を感じる」などの3項目 ($\alpha=.75$) を用いた。

内集団からの協力期待知覚 操作チェック項目として、「このゲームでも、赤チームの他のメンバーは、同じチームのメンバーどうし、お互いに助け合うことを期待している」の1項目を用いた。

以上、いずれの質問項目も筆者らによって独自に作成され、「全くそう思わない(1)」から「強くそう思う(7)」の7件法で評定してもらった。

結果

Table1 に本研究で得られた結果の平均値と標準偏差を記載した。Table2 に罰金額と事後質問項目で測定された変数間の相関行列を記載した。罰金額は正規分布から逸脱していた。そのため、相関分析は、罰金額と他の変数との相関は spearman の順位相関を用いた。それ以外の相関は pearson 積率相関を用いた。平均値を比較する分析では、t 検定を用いた。t 検定は正規性の逸脱に頑健であるため (Posten,1978) , 罰金額に関しても t 検定を用いた。等分散の場合には student の t 検定を行い、非等分散の場合には Welch の t 検定を行った。さらに、構造方程式モデ

Table 1. 協力期待条件ごとの記述統計

	協力期待あり (N = 25)		協力期待なし (N = 25)		条件間比較		
	M	SD	M	SD	t	p	d
罰金額	270.68	160.28	166.32	163.00	2.28	.027	.65
報復動機づけ	3.92	2.50	2.48	1.87	2.31	.026	.65
賞賛獲得	2.71	1.27	1.73	.84	3.19	.003	.91
排斥回避	2.09	.94	1.87	1.25	1.43	.475	.20
罰金=協力認知	3.24	2.01	1.76	1.48	2.97	.005	.84
内集団同一視	5.88	1.24	5.16	1.19	2.10	.042	.59
自身の協力期待	5.88	1.77	5.28	1.39	1.33	.189	.38
内集団からの協力期待知覚	5.96	1.40	3.08	1.91	6.08	<.001	1.72

リングでは正規性の逸脱に頑健な最尤推定を用いた(Bollen, 1989)。媒介分析では nonparametric bootstrap 法を用いた。さらに、性差による違い(主効果と交互作用)は見られなかったため、以下の分析では、性別の効果は報告しない。

操作チェック

内集団からの協力期待知覚は、内集団からの協力期待あり条件 (M=5.96) の方が、協力期待なし条件 (M=3.08) よりも有意に高かった ($t(44)=6.08, p<.001, d=1.72$)。このことから、本実験における操作は有効であったことが確認された。

内集団からの協力期待が代理報復に及ぼす影響

まず、本実験における罰金行動が報復を反映した指標であることを確認した。罰金額は、報復動機づけと有意な正の相関を

示していた ($r_s = .56, p < .001$)。この結果は、罰金額が代理報復指標として妥当であることを示している。

本研究の主たる目的である、内集団からの協力期待の代理報復への効果を検討する(仮説 1)。t 検定の結果、協力期待あり条件 (M=270.68) では、協力期待なし条件(M=166.32) よりも、有意に高い罰金額を示していた ($t(48)=2.28, p=.03, d=.65$)。また、同様に、協力期待あり条件 (M=3.92) では、協力期待なし条件 (M=2.48) よりも、有意に高い報復動機づけを示していた ($t(45)=2.31, p=.03, d=.65$)。このことから、本実験においては、内集団からの協力期待があるときには、内集団からの協力期待がないときよりも、対戦相手の外集団性員に対して、より強い報復動機づけを抱き、その結果大きな罰金額が与えられていた。仮説 1 は支持された。

Table2. 変数間の相関

	1	2	3	4	5	6	7
1. 罰金額	—						
2. 報復動機づけ	.56 **	—					
3. 賞賛獲得	.21	.36 *	—				
4. 排斥回避	.17	.27 †	.63 **	—			
5. 罰金=協力認知	.20	.33 *	.45 **	.25 †	—		
6. 内集団同一視	.15	.13	.02	-.06	.13	—	
7. 自身の協力期待	.14	.14	-.03	.04	.07	.27 †	—
8. 協力期待知覚	.36 *	.42 **	.40 **	.16	.21	.25 †	.32 *

Note. † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$. 罰金額と他の変数との相関に関しては、スピアマンの順位相関を用いた。それ以外の相関に関しては、ピアソンの積率相関を用いた。

集団内協力として見なされる代理報復

代理報復は集団内協力として見なされていることを検討するため、罰金行動がどの程度集団内協力として見なされているかを尋ねた。罰金=協力認知の事後質問項目を検討する(仮説2)。罰金=協力認知は、期待あり条件 ($M=3.24$) では、期待なし条件 ($M=1.76$) よりも、有意に高かった ($t(44)=2.97, p=.005, d=.84$)。また、罰金=協力認知は、報復動機づけと有意な正の相関が見られた ($r=.33, p=.02$)。しかしながら、罰金額とは有意にはいられなかった ($r_s=.20, p=.16$)。以上より、これらの結果は、代理報復が集団内協力として見なされていることを示す傍証だといえる。仮説2は支持された。

賞賛獲得と拒否回避の集団内評判過程

次に、賞賛獲得と拒否回避という内集団からの評判の心理的影響過程を検討する。協力期待あり条件 ($M=2.71$) では、協力期待なし条件 ($M=1.73$) よりも、賞賛獲得が高かった ($t(42)=3.10, p<.01, d=.91$)。その一方で、協力期待あり条件 ($M=2.09$) と協力期待なし条件 ($M=1.87$) の間に、拒否回避の有意差は見られなかった ($t(48)=1.43, n.s., d=.20$)。

本研究で想定した影響過程は「内集団からの協力期待->賞賛獲得 and 拒否回避->報復動機づけ->罰金額」である。全体の媒介効果を見るために、AMOSによる構造方程式モデリングによる検討を行った。本実験のサンプルサイズは大きくない。しかし、本研究のモデルのような潜在変数を用いない複雑ではないモデルであれば、小サンプルであっても用いることができる (Bollen, 1990)。また、賞賛獲得と拒否回避をともに媒介させた当初の予測のモデルから、単相関の有意性や修正指標を元に、モデルの修正を行った結果、十分な適合度が得られた ($\chi^2=4.952, df=6, p=.550, GFI=.963, CFI=1.000, RMSEA=.000$)。小サンプルデ

ータにも適用できる分析方法だとされる (Bollen & Stine, 1990) bias-corrected bootstrap method with 2000 resamples を用いた結果、「内集団からの協力期待->賞賛獲得->報復動機づけ->罰金額」の媒介効果は有意であった (95% CI [3.87, 53.87])。

まとめると、内集団からの賞賛期待があることで、内集団成員から賞賛されると強く知覚される。その結果、強い報復動機づけを持ち、多くの罰金を外集団成員に与えた。それに対して、拒否回避の効果は見られなかった。仮説3は部分的に支持された。

内集団同一視の代替解釈

本研究で得られた結果は、内集団同一視からは説明できないと予測した。事後質問紙における内集団同一視は、期待あり条件 ($M=5.88$) では、期待なし条件 ($M=5.16$) よりも、有意に高かった ($t(48)=2.03, p<.05, d=.59$)。しかしながら、内集団同一視は、罰金額 ($r_s=.15, p=.28$) とも報復動機づけ ($r=.13, p=.38$) とも有意な相関は見られなかった。また、ノンパラメトリック・ブートストラップによる媒介分析の結果として、内集団同一視は、実験条件と罰金額の関係 (90% CI [-15.42, 47.13])、実験条件と報復動機づけの関係 (90% CI [-0.20, 0.56]) も媒介しなかった。以上の結果から、少なくとも本実験では、内集団からの協力期待が代理報復を促進したのは、内集団同一視が高まったためだという、社会的カテゴリー化からの代替説明は排除された。

また、代理報復の前に測定した、自身が内集団成員に協力を期待した程度として自身の協力期待を分析した。本研究では、代理報復前の内集団同一視を測定していない。そこで、社会的カテゴリー化と他者との類似性を予測することが指摘されている Social projection 研究 (Clement & Krueger, 2002) に基づき、我々は自身の協力期待の得点を代替的に用いた。自身の協力期

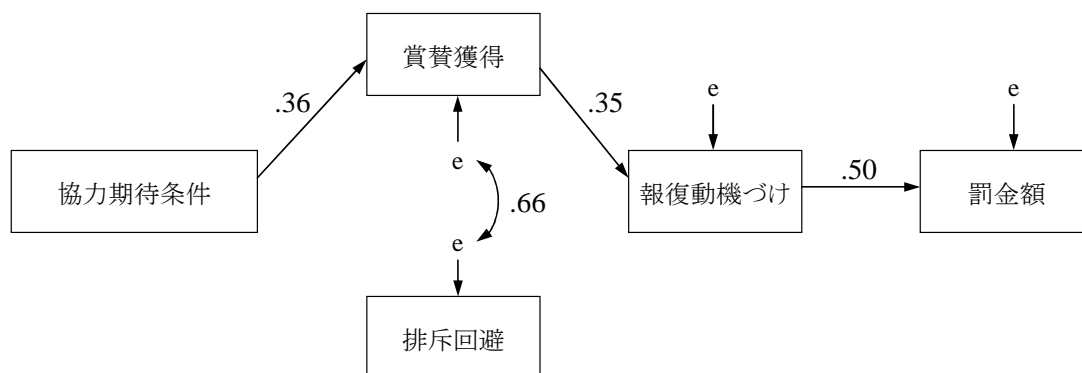


Figure 1. 集団間代理報復における協力期待の心理過程

Note. 協力期待条件はダミー変数である(協力期待なし=0, 協力期待あり=1). すべての係数は有意である ($p < .05$)

待においては、期待あり条件と期待なし条件に有意な平均値の差は見られていない $t(45) = 1.33, p = .19, d = .38$ 。また、自身の協力期待は、罰金額 ($r_s = .14, p = .32$)、報復動機づけ ($r = .14, p = .34$)との関係は見られていない。また、媒介分析の結果として、自身の協力期待は、実験条件と罰金額の関係も (90% CI [-4.08, 40.73])、実験条件と報復動機づけの関係 (90% CI [-0.06, 0.47])も媒介しなかった。このことは、内集団同一視の効果がないことを示した。

考察

代理報復における集団内評判

本研究では、集団内力学の視点から、内集団からの協力期待が代理報復を強めるという証拠を提供した。本実験では、内集団成員から協力を期待されている状況では、協力が期待されていない状況よりも、多くの罰金を対戦相手の外集団成員に与えていた。また、その際により強く報復動機づけを抱いていたことが示された。

この結果の理由として、代理報復が一種の集団内協力として見なされていたことから説明できるだろう。事後質問項目の罰金＝協力認知の結果からは、代理報復は一種の内集団への協力として認知されていたことが指摘される。この結果は、Nawata & Yamaguchi (2011b) と同様の結果であった。そのため、内集団から協力を期待されることが、代理報復を行えば賞賛獲得ができるという予期を高めた。

さらに、賞賛獲得の媒介効果が重回帰分析と構造方程式モデリングから示された。すなわち、内集団からの協力期待を受けると、内集団から賞賛を獲得できると知覚することで、より強い報復動機を抱き、外集団成員に強い罰金を与えていた。Nawata & Yamaguchi (2011a) でも賞賛獲得と代理報復の正関連は見られている。代理報復は、集団内協力という、内集団成員から高く評価されるポジティブな行為として見なされている。そのため、代理報復の行為者は、代理報復を行うことで、内集団から賞賛が獲得できると考えたといえる。この賞賛の獲得を求めた心理過程が、内集団からの協力期待が代理報復を強めた理由である。

社会的評判の研究は、他者から賞賛を獲得するために、攻撃などの反社会的行動が行われることがあることを示した (Emler & Reicher, 1995)。攻撃することで評判を獲得できるときに、内集団成員は攻撃に促進的影響を与える。身内が危害を受

けたとき、代理報復が協力というポジティブな行為だとみなされる場面である。このとき、人々は、賞賛獲得を求めて、代理報復を行う。内集団他者からの協力期待は、評判高揚に対する人の動機づけを刺激して、より強い代理報復を促進する。

その一方で、本実験では、拒否回避と代理報復の関係は見られなかった。これは、本実験場面では仲間から拒否される可能性が乏しかったためかもしれない。これまでの研究では、集団過程において、内集団からの拒否や排斥は、人間の心理や行動に大きな影響をもたらすことが指摘されている (e.g. Twenge, Baumeister, Tice, & Stucke, 2001)。今後は、実際に社会的排斥の可能性を操作した実験による検討を行うことが求められると言える。

社会的カテゴリー化

本実験では、内集団からの協力期待が社会的アイデンティティを高めていた。しかし、内集団同一視は代理報復や賞賛獲得と関連していなかった。この結果から、本実験の結果は内集団同一視の高まりが原因であるとは言えない。ただし、このことは、代理報復における内集団同一視の役割を否定するものではない。集団内協力と内集団同一視は強く結びついた現象である (Kramer & Brewer, 1984)。また、所属欲求と評判懸念は関連したものである (De Cremer & Tyler, 2005)。なぜ集団内で賞賛を得ようと行動するのかに関しては、社会的アイデンティティ過程や所属欲求は重要な視点を提供する。その意味で、賞賛獲得の過程と社会的アイデンティティ過程は根底の部分ではつながっていることも考えられる。

制限

本研究にはいくつかの知見の制限がある。第一の問題点として、代理報復を課す前の内集団同一視が測定されていない。代理報復と内集団同一視の関連を明確につかむためには、代理報復を課す前の内集団同一視の強さと代理報復の関連を検討する必要があった。ただし、事後的な内集団同一視の測定は行っており、代理報復との関連がないことは確認した。社会的カテゴリー化は代理報復の重要な過程である以上、今後の実験では、代理報復を課す前の内集団同一視の強さの操作や測定を行うことが求められる。

2つ目に、本実験では、協力期待を受けたときに、本実験では罰金を与えるか否かしか行動の選択肢が存在しなかった。し

かし、集団間報復のみが協力期待に応える方法ではない。今後の実験では、参加者が攻撃以外の選択肢を取ることでできる場面で実験が求められるだろう。

3 つ目に、本研究は代理報復の行為者の行動や動機づけにのみ着目している。そのため、実際に内集団観衆が代理報復の行為者を賞賛するかどうかは、検討されていない。今後は、内集団観衆が代理報復とその行為者をどのように評価するかを明らかにすることが求められる。

4 つ目に、本研究の説明としての praise gain も retaliatory motivation はどちらも心理変数であり、説明レベルが同じである。そのため、明白な因果関係はわからない。本研究で示した以外の multiple reasons が存在するかもしれない。因果性を議論するための十分なデータを我々は持っていない。今後因果性に関しては更なる検討が必要となるといえる。

結論

本研究では、集団内評判の力学の視点から、内集団からの協力期待が代理報復を強めることを明らかにした。この効果は、賞賛獲得を求めることで説明された。人は、他者の評判を敏感に意識しながら協力行動を行う。そのため、代理報復は集団内協力としてみなされるため、人々は同様に賞賛と良い評判を求め、代理報復を行う。今後さらなる評判メカニズムの解明が期待される。

References

- Bollen, K. A. (1989). *Structural equations with latent variables*. Wiley New York.
- Bollen, K. A. (1990). Overall fit in covariance structure models: Two types of sample size effects. *Psychological Bulletin*, 107, 256-259.
- Bollen, K. A., & Stine, R. (1990). Direct and indirect effects: Classical and bootstrap estimates of variability. *Sociological Methodology*, 20, 115-140.
- Borden, R. J., & Taylor, S. P. (1973). The social instigation and control of aggression. *Journal of Applied Social Psychology*, 3, 354-361.
- Carver, C. S., & White, T. L. (1994). Behavioral inhibition, behavioral activation, and affective responses to impending reward and punishment: The BIS/BAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 319-333.
- Choi, J. K., & Bowles, S. (2007). The co-evolution of parochial altruism and war. *Science*, 318, 636-640.
- Clement, R. W., & Krueger, J. (2002). Social categorization moderates social projection. *Journal of Experimental Social Psychology*, 38, 219-231.
- De Cremer, D., & Tyler, T. R. (2005). Am I respected or not?: Inclusion and reputation as issues in group membership. *Social Justice Research*, 18, 121-153.
- Emler, N., & Reicher, S. (1995). *Adolescence and delinquency*. Oxford: Blackwell.
- Froming, W. J., Waker, G. R., & Lopyan, K. J. (1982). Public and private self-awareness: When personal attitude conflict with social expectations. *Journal of Experimental Social Psychology*, 18, 476-487.
- Higgins, E. T. (1998). Promotion and prevention: Regulatory focus as a motivational principle. In: M. P. Zanna ed. *Advances in Experimental Social Psychology* (Vol. 30), p. 1-46. San Diego, CA: Academic Press.
- Nawata, K., & Yamaguchi, H. (2011a). The escalation of personal altercations into intergroup conflict: Initiating intergroup vicarious retribution in an ad hoc laboratory experiment group. *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 51, 52-63. (縄田健悟・山口裕幸 (2011b). 個人間の危害行動が集団間紛争へと拡大するとき: 一時集団における集団間代理報復の萌芽的生起 実験社会心理学研究, 51, 52-63.)
- Nawata, K., & Yamaguchi, H. (2011b). Ingroup audience effect on intergroup vicarious retribution. *Japanese Journal of Social Psychology*, 26, 167-177. (縄田健悟・山口裕幸 (2011a). 集団間代理報復における内集団観衆効果 社会心理学研究, 26, 167-177.)
- Kramer, R. M., & Brewer, M. B. (1984). Effects of group identity on resource use in a simulated commons dilemma. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 1044-1057.
- Lickel, B., Miller, N., Stenstrom, D. M., Denson, T. F., & Schmader, T. (2006). Vicarious retribution: The role of collective blame in intergroup aggression. *Personality and Social Psychology*

Nawata, K. & Yamaguchi, H. (2013). Intergroup retaliation and intragroup praise gain: the effect of expected cooperation from the ingroup on intergroup vicarious retribution. *Asian Journal of Social Psychology*

Review, 10, 372-390.

Posten, H. O. (1978). The robustness of the two-sample t-test over the pearson system. *Journal of Statistical Computation and Simulation, 6*, 295-311.

Puurtinen, M., and T. Mappes. (2009). Between-group competition and human cooperation. *Proceedings of the Royal Society—Biological Sciences, 276*, 355–60.

Turner, J. C., Hogg, M. A., Oakes, P. J., Reicher, S. D., & Wetherell, M. S. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford: Blackwell.

Twenge, J. M., Baumeister, R. F., Tice, D. M., & Stucke, T. S. (2001).

If you can't join them, beat them: Effects of social exclusion on aggressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology, 81*, 1058-1069.

Van Vugt, M., & Hardy, C. L. (2010). Cooperation for reputation: Wasteful contributions as costly signals in public goods. *Group Processes and Intergroup Relations, 13*, 101-111.